

(七) 仔山羊誕生

年の暮れに種つけをした時、女房は山羊の妊娠期間が5カ月だと聞いていた。出産は5月の末になる筈である。お産が近づくと、出口からヌルヌルした液が出てくるからわかるよ、と言われていたから、女房は毎日かがんで尻を覗く(のぞ)く。なかなか変化がない。だいたいどこから出てくるんだろうと思うが、人間だとオシッコの出口とウンチの出口の間にそれ専用の出口がある。とすると、ま、あの辺かな、と尻の、毛の生えてない逆三角形のピンク色のシワシワの部分、ゴメンね、と女房は覗く。

山羊は乳も大きくなってきた。たくさん出そうである。亭主は飲みたいが蹴飛ばされるのはイヤだから、「おまえ搾(しぼ)れよ」と女房に言う。女房も搾りかたはまるで知らないのだが、この亭主には、珍しいことは女房に言いさえすれば、必ず目を輝かせてやってくれるだろう、という妙な信頼感がある。

山羊の腹はバカでかくなり、何匹腹にいるんだろうかと夫婦は頭をひねる。1匹ないしは2匹、たまに3匹のことがあると言う。母山羊自身はひとりっ子だったらしいが。

さすがに母山羊は歩き方がヨタヨタしてきた。アスファルトを歩くとペシャペシャと妙な音をする。後ろ足を見ると、今まで山羊は2つの蹄(ひづめ)で、つまり人間でいうと2本の指の爪先立って歩いていたのが、後ろ足の踵までつけて歩いている感じである。

重かろう。

人間でも妊娠中は体が重い。

5月の20日を過ぎると、なんとなくピンクの逆三角形が膨らんできた。もうあまり先のことはなさそうである。

出産時はギャアギャア鳴くのか。



「いんや、気がついたら生まれてた、てなもんだよ。ま、たまには難産で死にそうな声出すのもいて、しょうがないから腹へ手え突っこんで引っ張り出すこともあるけどね」と山羊農家のおばさんは言う。

頼むから静かに産んでくれ、ここは団地だからな、と女房は山羊に手を合わせて拝む心境である。山羊の産婆をやる自信はない。

その日。

前日が5月とは思えぬ暑さだったのが、うってかわって風が涼しい。日中いつものように空き地に杭を打って草を食べさせ、「さあ夕方は寒い、檻に入れてやろう。今日はえらく鳴かないね。あれ、珍しい、座ってるよ」と女房が近づいてみれば、オー、仔山羊が1匹傍にいる！

猫よりは一回り大きい。全身濡れている。下半身には粘膜がついていて、それを母山羊が一心に舐めている。母山羊の尻からは大きな水風船のようなものがぶら下がっていて、これは仔の入っていた袋か。臍の緒（へそのお）らしきものも見える。ということは、生まれてから1時間もたっていない。

たいしたもんだ。

「人間なんか大騒ぎするのに、静かにひとりで産んじまったよ、スゴイねえ、草食動物だものね」と女房は呟（つぶや）きながら、「ハテ、寒いね、このまま外に置いとけないよ。中に入れなきゃ。でもこの産まれたての仔山羊にわたしが触ったら、まちがいなく母山羊は襲いかかるだろうなあ。ハテ困った」と悩む。

イヤイヤやっぱりほうっちはおけない。下の娘を呼び、母山羊の鎖をひかせて女房は仔山羊を抱え上げた。濡れている。さっさと檻へ連れて行くと母山羊も従順についてきた。女房が手を離すとまだ足の立たない仔山羊はペシャリと腹から落ちた。

おやゴメン。乱暴だったね。かあちゃん山羊、お産の後は疲れてるよね、よしよし。

牛の配合飼料をやると母山羊はむさぼり食った。

犬が騒ぐ。「今までいなかった新しいのが



いる！小さい！何だこれは！」と興味津々（しんしん）で目を見張り、尻尾を振っているのは歓迎のしるしだろう。犬の全身に嬉しさが満ちている。いい兆（きざ）しである。仔山羊に咬（か）みついたらたまらない。



翌日。

仔山羊は立っている。

ヨタヨタとおぼつかない足どりで歩く。

なんとも言えず可愛らしい。

触ると真っ白い毛皮のフワフワ柔らかいこと。母山羊の毛は薄汚れてゴワゴワ硬いののに。仔山羊を抱きあげると、驚いて鳴いた。鳴き声も母山羊より幼い。

赤ん坊を抱くように女房が仔山羊を胸に抱えると、これも柔らかい耳がヘタヘタと頬をこすり、思わず女

房の顔に笑みがこぼれる。母山羊と同じ横長の瞳が、顔の両側から女房を見つめる。白い頬の、眼の周りがうっすらピンク色に染まっている。

あんまり可愛いから女房は日に二度も三度も仔山羊を抱きかかえる。口先で頬をつつかれても可愛い。

亭主もいやがるのを追いかけては抱っこして喜んでいる。その目尻の下がった顔は、まるで初孫を抱いたジジの如し。

都心にある亭主の会社で、山羊の仔が産まれたという話題になる。女房が苦心して写真をメールで送ると大騒ぎ。

そこへ産休で休んでいた女性社員が、生まれた赤ん坊を連れてきた。その顔を見て亭主が「いやあ、人間も犬も山羊も、小さい時はみんな文句なしに可愛いねえ」と笑ったもので、女性社員は本気で腹を立てた。

わたしの可愛い赤ちゃんを、山羊の仔なんかと一緒にしないでくださいっ！

仔山羊の腹を見ると、臍の緒が乾きかけ、その下にでっぱりがある。もっと下に乳首が2つ見えて、もうひとつでっぱりがある。はて、これは雄なのか雌なのか。母山羊の腹を下から見たことがないからどうにもわからない。

謎は 1 週間ほどで解けた。おしっこが腹の真ん中から真下へ落ちていたのである。母山羊は小腰をかがめて尻のほうからするから、子山羊は雄だ。ひと月すると、下腹のでっぱりは 2 つのタマだと明らかになってきた。オチンチンとタマがずいぶん離れている。

ふうん。

仔山羊は母山羊の右側の乳しか飲まない。左側の乳はパンパンに張っている。たぶん乳首の先が詰まって出が悪いのだろう。痛いに違いない。子どもを産んだことのある人ならたいてい経験がある。

これは搾ってやらねば。

が、母山羊は逃げ回って乳になんぞ触らせない。

人間がそんなところに触ったことないものねえ。それにお乳が張ってる時は、ちよっと触られてもメチャクチャ痛いものねえ。

「山羊の乳を搾（しぼ）りたかったら、杭（くい）をな、3 本打つんだよ」と近所のじい様が言う。「慣れたら杭なんぞいんねえけどよお、おめえじゃ無理だっぺ」

「へえ。3 本？」

「んだ。首んとことな、後ろ足 2 本だ。そこへ足いくく（る）んだ。台の上だと山羊が高くなるからよお、搾る人間が楽だっぺ」

「で、牛みたいに横から搾るんで？ それとも後ろから？」

「そりやおめえ、後ろからだっぺよう」

「蹴とばされねえ？」

「だいじ（大丈夫）だあ」

こう、な、とじい様は親指と人差し指で輪をつくって見せ、

「で、残りの指いギュッ、ギュッ、てやって搾んだよ」

が、女房は杭を 3 本打つのを面倒がった。下手が釘をまっすぐ打てないのと同様、「かけや」を振り上げて杭の芯に打ちこむのは、女にしては力があって、廊下の電球が切れたら亭主を呼んで肩車して換えさせる女房も、苦手なのである。それに余分の杭が手元にない。

山羊小屋を眺め、杭のうち2本は檻（おり）の柱で代用することにし、もう1本、壊れたデッキブラシを地面に打ちこんだ。

さあ足をくくるぞ。

ところがどっこい。

山羊は足をピツ、ピツと跳ね上げ、逃げ回る。女房は大声で下の息子を助っ人に呼び、まず山羊の足首に紐（ひも）を結びつけ、さらにその紐を杭にゆわえつけた。ふたりで大汗をかいても30分かかる。

女房が乳に触る。

その瞬間山羊は跳ね上がる。アツという間に元デッキブラシの杭が抜ける。

それではと、女房は山羊の2本の足を檻に直接くくる。

女房は乳を搾る。山羊は身をよじる。それでも女房は搾る。なかなか出ない。

さらに30分かかって、やっとコップに半分ほどたまった。

檻は歪（ゆが）んだ。

ヤレヤレと女房が汗を拭い、乳を舐（な）めてみると、甘い。牛乳とは違う風味と匂いがする。

あくる日はコップに2杯ほど搾れた。仔山羊が吸いつく時を真似て、乳首を持つてから突き上げるように指を狭めると、ビュッと乳が噴き出てくる。欲しがっていた近所の家を持っていく。もの好きな夫婦の子どもたちは、親ほどにもの好きではなく、山羊の乳なぞ飲もうとはしないのである。

もったいない。

女房は牛乳の代わりにホットケーキに混ぜて焼き、知らん顔で子どもの朝飯に食べさせた。

「五月（ごがつ）」と下の娘が名づけた仔山羊はみるみる大きくなった。

犬の仔など産まれて1週間くらいは目が開かず、足も立たずに腹をつけたまま這いずり回っているが、山羊の仔はさすが草食動物、1週間で達者に走り、赤ん坊らしさが少し消えた。ひと月たつと、人間に捕まらないくらい走るのが速くなった。抱え上げるにもデカ過ぎる。檻から出して母山羊を杭につなぎ、雑草を食べさせる

と、互いに呼びあって、母山羊の傍から離れない。

そのうち行動半径が広がってきた。見えないと、母山羊はけたたましく鳴く。おかしいと女房が探すと、仔山羊は1メートルほどの崖下におり、また背丈よりも高い崖をタタッと跳びあがって戻って来た。山羊を山の羊と書くわけである。

犬の傍にも近づく。

しばらく前から、犬は山羊に吠えなくなっていた。

初めは山羊を檻から出し入れするたび吠えるので、怒鳴り蹴飛ばし、女房はジョンを叱った。そのうちちよいと思案をし、「今から山羊を出すけどおまえ吠えるんじゃないよ」と女房が一睨(にら)みしてから山羊を連れ出すと、犬はその時は「わかりました」という顔をする癖に、すぐに忘れて吠える。山羊をつないでおいて、「このバカ」と肩をいからし大股に歩いて女房が叱りに行くと、犬は耳を寝せ、尻尾を股の間に挟(はさ)んでとっとと逃げる。わかってはいるのだ。それを繰り返すうち、ウー、とうなるだけになり、さらにそのうち吠えもうなりもしなくなった。

ここぞとばかり、「おまえはお利口だねえ、ホントにお利口」とジョンの頭を両手で撫でさすってやる。学習させねば。

仔山羊が近づくと、ジョンは、遊ぼう、遊ぼう、おいでよ、と露骨に嬉しそうな顔で尻尾を振る。仔山羊はジョンを頭で突く。ジョンはお返しに前足をかけ、ふざけて噛もうとする。仔山羊はイヤだとヒョイと逃げる。また近づくと、2匹とも嬉しそうである。吉はジョンほど遊びたがらないので、子山羊はもっぱらジョンと遊ぶ。

母山羊は警戒して、これ、あんな危ない奴のところへ行っちゃだめだよ、と声を高くして鳴くが、しだいにジョンが安全なのを理解したらしい。

ある日、犬小屋の周りの草を食べさせようと母山羊を杭につなぐと、ジョンはのんきにどうぞ、という顔をする。が、一度ジョンに襲いかかられ、3カ所咬みつかれたことのある母山羊のほうは、そののんきにはいかない。人間だって殴ったほうはじきに忘れるが、殴られて痛い思いをしたほうは10年たっても覚えているというものだ。

母山羊はジョンに頭突きをくらし、くらし、犬小屋の奥深く追いやったあげく、皿に残っていたジョンのドライフードを全部食べた。

かつての仇（かたき）をとったのである。

でも犬のドライフードには肉が入っているんじゃないの？

山羊は草食じゃないの？

亭主と女房は顔を見合わせる。

ああ、そういえば、イギリスで狂牛病が猛威をふるったのは、牛を早く太らせようと、狂牛病で死んだ牛の死骸を乾燥して粉にし、配合飼料の中に混ぜて食べさせたから、次々と伝染しちゃったんだよ、と亭主が記憶をたぐる。

配合飼料なら何でも食べるんじゃないか。旨いと思うようにつくってあるんだよ。

でも犬用だよ。

うん、そこが不思議なんだよね。

不思議だねえ。

それから、機会あるごとに母山羊は犬のドライフードをむさぼり食った。ジョンは雪の剣幕におされて黙って見ている。もはや襲おうという気は毛筋ほどもないらしい。

やきもち焼きのジョンも、飼われ始めて半年たってやっと、「犬も山羊も同じ飼い主に飼われる仲間、そして犬より山羊のほうがエライ」という関係を受け容れたのであった。